寄付講座「国際報道—旧ソ連、ロシアの場合」の感想・質問への回答

毎日新聞外信部編集委員　飯島一孝

学生の皆さんの感想や質問を拝見し、あまりなじみのないソ連やロシアの話なのに、予想以上に私の話を理解していただき、的確な感想を持っているなと感心しました。ましてやソ連崩壊のころの記憶はないわけですから、すべてあとで学習した成果が表れているということでしょう。ただ、私の講義はソ連崩壊時にさかのぼり、その当時の各国の報道の違いから日本のメディアの変化、さらにロシアのメディアのその後の変貌まで対象にしたため、内容が盛りだくさん過ぎたかなとちょっと反省しています。そのためもあって、質問が多かったのかなという気がします。

そこで、具体的な質問にできるだけお答えしたいと思います。まず、ソ連崩壊を世界のメディアはどう伝えたかの中で、欧州メディアの「ゴルバチョフびいき」に関してですが、ゴルバチョフはソ連政治の中で初めて「ペレストロイカ（立て直し）」に取り組み、国内的にはグラスノスチ（情報公開）、国際的には「新思考外交」を展開しました。西側では「ソ連の軍拡を抑制し、東西の緊張緩和を推進した指導者」として人気があり、とくに近隣の欧州での人気はすごいものがありました。もちろん日本でもゴルビーと呼ばれ、人気がありました。だが、ロシア国民からは「外遊には必ずライサ夫人を同行させている」など、“西欧かぶれ”とみられ、民主派からは「ソ連共産党を頑固に守ろうとする保守派」としてエリツィンらから激しく攻撃されました。このように国内外で評価がまったく違う、稀有な人物なのです。

欧州が「ゴルバチョフびいき」だったというのは、先に述べたような人気のほかに、ソ連という枠組みを堅持してほしいという思惑があるからです。ソ連が崩壊して分裂すると、それこそ「パンドラの箱」を開けたようなアナーキーな状態になるという懸念があったからです。その典型がユーゴスラビアの解体で、国と国、あるいは民族と民族とで血で血を洗う紛争が起きました。欧州はこうした紛争が自国に被害が及ぶのを恐れたのです。そのため、ソ連が崩壊しないよう、ゴルバチョフになんとかがんばってもらいたいという思いから「ひいき」という気持ちが出たのです。

第二に、クーデター報道で毎日新聞が第一報の夕刊段階で「クーデター説も」の見出しをとったことを指摘しましたが「クーデターの可能性もある、という程度のことで紙面にしていいのか」との質問あるいは疑問がありました。私の説明が悪かったのかもしれませんが、単なる憶測から紙面化したわけではありません。①当時、ゴルバチョフの健康状態が悪いという話はなかった②ゴルバチョフ側から事件についてのコメントがまったくなかった、などから「大統領の自発的辞任ではなく、反対勢力から無理やりやめさせられたのではないか」との見方が強まり、クーデターの可能性が高いと判断したのです。朝刊時間帯にはクーデターであることが判明したわけで、毎日新聞の判断が正しかったことが証明されました。ある事象を報道する場合、当局あるいは関係者の発表がなければ書けないというのでは報道機関の役割は果たせません。様々な取材から真実を見極め、それを読者にいち早く伝えることこそ必要なことだと思います。

第三に、ロシア報道の問題・課題の中で「欧米の視点に流されやすい報道姿勢」を指摘しましたが、この関連で「欧米メディアからの引用で報道していたというのは倫理的な問題にならないのか」との質問がありました。欧州、ロシアはまさに欧米メディアの地元であり、情報も入手しやすいことは当然です。ただ、その内容を日本メディアが報道する場合は、きちんと情報源を明記しなければいけません。「○×通信によると」あるいは「○×新聞の報道によると」と明記して記事にすれば問題はありません。

第四に、ロシアの報道の自由に関係して「政権に批判的なメディアはあるのか、そのようなメディアは取材を邪魔されたりしないか」との質問がありました。時期によって違いますが、テレビはおおむね政権にコントロールされていますが、新聞では政権批判を続けているところが何

紙かあります。何者かに殺害されたポリトコフスカヤ記者が所属していたノバヤ・ガゼータ紙もその一つです。一昨年、モスクワを訪れた際に同紙の編集幹部と話をする機会がありましたが、その幹部は「広告がなかなか集まらないので苦労している」と話していました。批判的な新聞には政権側から有形無形の圧力があるようです。

第五に、女性記者や旧KGB中佐の殺害から「ロシアは怖い」との印象を持っている方が多いことは分かりますが、記者だからといって理由もなく殺されるわけではありません。とくに外国人の場合は夜間、危険地帯に出なければ危ないことはないと思います。これに関して「モスクワ時代はどうだったのですか」との質問がありました。私はクーデター直前に家族を呼び寄せたわけですが、車から物を盗まれるなど盗難事件は何度かありましたが、けがするような事件に巻き込まれたことはありませんでした。昼間、買い物などする時、妻はスリに気をつけたといっていましたが、観光客がスリに遭うことは西側の国でもしょっちゅうあることです。必要以上に怖がることはないと思います。

以上、5点についてお答えしましたが、これで少しは理解が深まったでしょうか。参考になれば幸いです。　　以上です。